

魔法のプロジェクト2021 活動報告書

報告者氏名： 千松 聡司 所属： 大阪府立思斉支援学校

記録日：2022年2月26日

キーワード：見通し、コミュニケーション

【対象児の情報】

・学年

小学部 6年生

・障害名

知的障害を伴う ASD

- ・療育手帳 A（重度に相当）

・各検査結果

S-M 社会生活能力検査

- ・1年生時 SQ 28 SA 1-10
- ・4年生時 SQ 18 SA 1-8

・太田 stage

- ・2～5年生時 ステージ I-3

・障害と困難の内容

- ・コミュニケーションの手段が乏しく、関係の少ない人とのやりとりをするには相手が本児のことを知っていなければ成立しにくい。
- ・身につけている表出手段のみでは、コミュニティを広げていくことが難しい。
- ・見通しが立たず、要求しても叶わないことがある。（給食食べたい、デイに行きたい等）

・使用した機器

✔Pad

【活動目的】

- 当初のねらい
 - ①自分の思いや要求を伝えられる相手や場面、内容を増やす。
 - ②学校生活において、スケジュール理解を深める。

- 実施期間
R3.5～R4.2

- 実施者
千松 聡司、学年担任
- 実施者と対象児の関係
学級担任（昨年度から持ち上がり）

【活動内容と対象児の変化】

（1）対象児の事前の状況（主に昨年度身についてたこと）

●コミュニケーション

- 言葉による表出はないが、喃語あり
（「いや」「こわい」「やばい」等、場面に沿った言葉を言うこともある。）
 - いくつかのサインを使用して意思表出ができる
- ※イエス、ノー、おなか空いた、もう1回、お願い、ください
- いくつかの絵カードを使って、要求が言える
- ※行きたい場所、ストローください、お茶飲む等
- 写真や動画を表示させて、要求を伝えられるようになってきた
- ※コロンを嗅ぎたい、給食を食べたい、トランポリンしたい等
- 頻度は少なくなったが、ストレスが高い時や気分が整わない時等は自傷や失禁で表現することもある
 - ほぼ決まった内容を繰り返し表出する
 - 何とかして伝えようと様々な方法を試す（サイン、クレーン等）が、相手に真意が伝わらないことも多い

●行動面、興味、関心

常同的に、ストロー等を指先で回す ティッシュの箱をトントンたたく

くすぐり遊び、強めのマッサージが好き

自ら活動に参加することはあまりなく、受け身になりがち

形、色、文字のマッチングができる

クラスメートと追いかっこができるようになった

興味のある本（寿司図鑑や料理本）への関心が出てきた

タブレットを見て見通しを持ったり、自身を振り返ったりできるようになった

内言語が多く、言葉の理解がうかがえる

褒められることが好き

食欲旺盛

柑橘系の爽快感のある匂いを好む

●日常生活

<家庭>

昨年度より落ち着いて過ごせることが増えた

買い物や食事等の要求を画像や絵カード等で表出し、外出を楽しむ

学校への登校は、徒歩5～10分程度（日によってまちまち）

<学校>

参加できる授業が増えた

休憩する時間をしっかり設け、その場所も定着した

校外学習、学習発表会等ハードルの高い行事も落ち着いて参加できた

新しい環境に馴染むまでに、時間がかかる

直後の活動は、写真や動画で理解できる

各活動に関しては、事前の視覚情報が必要である。特に、場所についての情報を見ることで安心して移動ができる。

行くトイレが決まっている。

活動については、参加の有無を本人に確認し、少し様子をうかがってから参加できることも多い。（活動の様子を動画で撮影し、その場で見ることも有効）

◆困りの整理

<コミュニケーション>

①伝えたいことがあるが、上手く伝わらない。

いくつかのサインを獲得しているものの、それで全ての要求や表出がカバーできているとは言えない。突然走り出して追いかっこを始めたり、伝わらなくてイライラしたり、泣いたり、諦めたりという様子が見られる。また、同じ要求の繰り返しになってしまっている（伝わるから）。であれば、より多様な表出を獲得し、伝わった、叶った経験を重ねることで、コミュニケーションを肯定的に捉えられるのではないだろうか。

②関わる相手が限定的である。

過去5年間、学年担任や放課後デイのスタッフ以外との関わりがほぼ皆無で、限られたコミュニティの中で過ごしてきた。しかし、次年度は中学部である。本児のことを知る人や、本児が知っている周囲の教員は少ない。『いつでも、どこでも、だれとでも』適切にやりとりする力を身につけることで、安心して過ごせるのではないだろうか。

〈見通し、生活とスケジュール〉

③少し先の見通しが立たず、叶わない表出をした時に断られる。

給食の時間や下校の時間等、対象児に合わせて変えることのできないスケジュールに関して見通しを持つと、より精神的に安定して過ごせるのではないだろうか。食べることに関心が高いが、「おなかすいた」と表出しても叶わないことが多い。時にはエプロンを用意してアピールすることもある。

(2) 活動の具体的な内容と事後の変化

①コミュニケーション

〈step1〉新しい先生と関わってみよう(図1)

今年度、教員5名に対して持ち上がりは3名であった。本児が獲得しているサインは、双方が意味を理解していないと伝わりにくい。サインの共有と、行動を共にすることに焦点を当てた。
→支援者の構造化を図ることで、過ごしやすくなった。



(図1)

〈step2〉他の学年の先生と関わってみよう

小学部の他の教員と関わる時間を設定した。

本児は、他学年の教員と関わる機会が圧倒的に少ない。縦割りの学習においても基本的に担任が一人支援にあっていた。落ち着いて生活できるようになり、活発に移動する場面も増えたので、周囲の教員の目に触れることも増えてきた。

予め、好きなことや本人の表出について打ち合わせをしておき、他学年の教員とやりとりする時間を設定した。

→自分の好きなことをしてくれる(この時はくすぐり遊び)ことが分かる
と、写真を出して伝えようとしていた。(図2)

→養護教諭にくすぐり遊びをして欲しいことを伝え、くすぐってもらえて嬉しそうにしていた。養護教諭の手が止まると、「もう1回やって」とサインで伝えていた。(図3)



(図2)



(図3)

〈step3〉 友だちにも簡単な要求をしてみよう

場を設定し、クラスメートに協力をお願いしてやりとりする場面を作った。

→「やって」のサインで香水を振ってもらうことができた。(図4)

→同様に、追いかけてくすぐり遊びをしてもらうことができた。

→自ら友だちへ関わろうとする様子が見られた。クレーンで引っ張り、絵カードで伝えてストローを取ってもらうことができた。



(図4)

〈step4〉 他学部の先生と関わってみよう

普段は全く関わりのない中学部教員と関わる場面を設定した。

→基本的には、サインでくすぐって欲しい、マッサージして欲しいことを伝えて、何度かやりとりすることができた。初見の相手であっても普段と同様に表出していた。(相手がサインを理解していることが前提である)

〈step5〉 表出の手段を増やそう

家庭と共通のアプリ「vocaco」を試してみる。(12月)

これは、VOCA機能のついたアプリで、タップすることで音声が出る。

→まずは、好きな物や身近な物(よく慣れている物やこと)をアプリに入れて促した。しかし、学校で必要とする表出に関しては、ほぼ絵カードで網羅できてしまっている現状があった。アプリの使用を勧められると「やれやれ」という表情で『仕方なく』操作する様子が見られた。

であれば、学校で伝える時に、使いやすく必要性の高い道具を拡充する方が良いと(卒業も近いので)判断し、絵カードの種類を増やすことにした。

②生活とスケジュール

〈step1〉 新しい教室に入ろう

3年ほど過ごした教室から場所が移動し、4月当初は教室に入ることができなかった。

教室の写真、動画を見て確認する。知っている友だちや先生がいることも確認し、安心できる場所だと認識できるようにする。(図5)

→主にワークスペース等で1日を過ごしていたが、4日かけて教室に入ることができた。



(図5)

〈step2〉 新しいデイサービスに行こう

今年度、デイサービスの変更があった。場所や人が変わることは本人にとって負荷の大きいことであるが、安心して行けるように学校で移動しているのと同じように事前の告知とデイの後家に帰る予定を確認した。

→その日の気分にも左右されるが、事前に写真で確認することで概ねスムーズに移動できた。

〈step3〉授業の見通しを持つ

あまり経験のない活動は、緊張が高いため本人のペースに合わせて活動を促した。

→野菜の種を植える活動では、「砂を触る」ことを視覚で伝えると移動でき、土を触ることができた。(図6)



(図6)

→運動会は、曲と動画を繰り返し見聞きすることと、移動先や自分の活動している姿を振り返って見ることで、楽しんで参加できた。(図7)



(図7)

→同様に、学習発表会、修学旅行、校外学習等の行事にスムーズに参加できた。

よく知っている活動は、場所が変わっても内容が分かると移動できた。

→新型コロナウイルス対策で身体測定を体育館で行った(普段は保健室)が、身長を測る時に自らイヤーマフを外して測定を受けることができた。

〈step4〉マスクをつけよう

マスクは非常に苦手である。

しかし、新型コロナウイルス対策、また持病がありコロナ感染時のリスクが高いのではという保護者の思いがある。

→給食前にマスク着用の時間を作った。タイマーで終わりを示し、その後に給食があることで見通しが立ち、少しずつ時間が延ばせて、喫食直前までマスクが着用できるようになった。なお、現在タイマーは不要である。

→登校時に学校までの道のり、電車内等、少しずつ場面も増やせている。

〈step5〉活動を選択しよう

本児にとって、学校の授業を他の生徒と同様に受けることに、現在はハードルがある。そこで、活動に向き合いやすくするために、授業の選択を行えるようにした。また、授業によっては途中で休憩に向かったり、途中から参加したりすることもある。1コマ全て参加することよりも、活動を選択できる環境を設定することで、より授業に向き合いやすく、実りのある学習にできると考えた。

→日によって差があるが、活動できる時はしっかり参加し、休憩が必要な時はそれを伝えることができた。

活動が選択できることによって、負担なく参加する様子が伺える。家庭やデイサービスにおいても落ち着いて過ごせる日々が続いている。

③その他

・文字の学習

枠の中に見本通り、一文字ずつ並べることができた。(ワーク、きょうしつ、きくんしつ等)
気持ちに左右されるが、音声と写真から文字カードを選択できる。(身近な場所、好きな場所、自分の名前、好きな音楽、等)

・トイレ

トイレに関してはこだわりが強いことと、他のトイレが怖い(暗いので)気持ちから、なかなか他のトイレに入ることができなかったが、信頼のおける人と入ることができて成功体験となると、誰とでも高学年用の共用トイレに入ることができた。(図8)

→現在は、見通しが立つとどのトイレでも入れる。
校外でも同様に(暗いトイレでも)入れた。(図9)



(図8)



(図9)

・家庭でのこと

今後のことも踏まえ、保護者はタブレット上の画像や絵カード等で意思表示をする手順を踏んでいる。これまでは本人の意向を汲み取って、生活しやすいような関わりをされていたが、本人に表出の機会を作ることを意識して接しているとのこと。

出かけたいアピールで、玄関で靴を履く→保護者が、行き先を選択させる
行き先を選択する→選択した通りに行動する
写真や動画を撮って帰宅して振り返る
ということ、夏休みから取り組み始めた。
本人はめんどくさそうにしているようだが、要求を伝えるための手順として捉えているとのこと。
→修学旅行で行った場所に再度行くことができた。
→スーパーやお気に入りの飲食店等の日常生活の範囲のことも同様に行えている。
→見通しがあると、歯医者はずんなり行けている。

【報告者の気づきとエビデンス】

主観的気づき

①見通しを持つことで、安心して一緒に行動できる人が増えたのではないかと。

普段使っている手段で、別の人と同じように支援しても活動できることが増えた。

②ICTは補助的な立ち位置で、絵カードやサインによるコミュニケーションの方がしやすいのではないかと。

ICTは自身を振り返る時に有効であり、頑張った、また行きたい、またやりたい等自身を肯定的に振り返ることができる。

③学校生活に見通しが立ったことで、生活しやすくなったのではないかと。(スケジュール)

叶わない要求(特に、お腹が空いた)はほとんど無くなった。

避けたい活動の時に休憩を選択でき、その後の活動にしっかり参加することができた。

例) ランニングは避けるが、その後の音楽やことば・かずでしっかり活動する。

図工は、作業を選択して参加する。等

※うまくいかなかった事

表出について、VOCA で広がりが見られると予測を立てて支援にあたっていたが、本人が使いやすいと感じる手段にはなっていない。しかし、操作については促しがあるで行えるので進学や今後の生活の中で必要性が見出せた時に改めて導入するのが良いと感じた。

エビデンス

①見通しを持つことで、安心して一緒に行動できる人が増えたのではないか。

i) 修学旅行(10月): 学年担任と行動

電車と徒歩で遊園地まで移動し、17時に解散するスケジュールで活動した。遊園地や電車での移動はほとんど経験がなかった。

普段学校で行っている基本的な支援と、繰り返し行った事前学習によって、見通しを持って最後まで参加できた。(図10)

アトラクションに乗ったことは無い本児であるが、昼食を食べるまでのスケジュール確認で一つだけアトラクションを体験することができた。(図11)

パーク内を笑顔に駆け回る様子が見られた。

(図10)



(図11)

ii) 校外学習(1月): 学部の教員(学年外、顔は知っている)と行動

バスでボウリング場に移動、その後バスと徒歩で移動し、ショッピングモールで食事と買い物をして電車で帰るスケジュールで活動した。事前学習でスケジュールや内容を確認して臨んだ。ボウリングは初めてであったが、7フレームまで活動できた。その後は時間まで休憩していた。(図12)

徒歩での移動もスムーズで、当該教員とフードコートで昼食を購入できた。(図13) 買い物学習はレジの待ち時間が難しく、購入する物を選択したが精算は教員で行った。

休憩を挟むことで、最後まで集団に合わせて行動できた。

(図12)



(図13)

iii) その他、学校での様子

ボランティアや非常勤講師、インターンシップで来る学生等、様々な人と関わることができた。

鬼ごっこをしたり、一緒にトイレに行ったり、授業に臨んだりする等活動の幅も広がった。

関わることができた教師・・・小学部: 10名(学年外、前年度は0) 中学部: 5名(前年度0)

保健室: 2名

iv) 保護者の印象、家庭での様子

上記校外行事の日は、帰宅後に嬉しそうな表情であったとのこと。また、冬休みの期間タブレットを持ち帰って家庭で振り返る宿題を出すと、その遊園地にまた行きたいことを保護者に伝えることができた。

「楽しく行けたことで自信がついて、言ってきたのだと思います。」とのこと。この後再び向かうことができた。

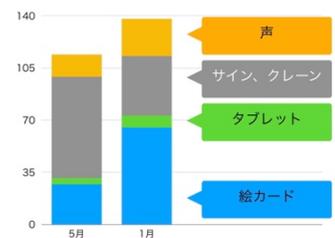
②ICTは補助的な立ち位置で、絵カードやサインによるコミュニケーションの方がしやすいのではないか。

自ら選択した表出手段をカウントすると、絵カードの数値は上昇しているが、VOCA機能を持ったアプリはそれほど大きな変化がないことが分かった。(図14)

サインは絵カードに反比例して減少している。

即時的に「YES」「NO」を伝える時にはサインが主流である。

※声については、音声であり言語ではない。



(図14)

③学校生活に見通しが立ったことで、生活しやすくなったのではないか。

- ・上記のように、活動の幅が広がった。
- ・叶わない表出は減少した。
- ・休憩したいはよく見られる。いつでも言える安心感がある。
休憩ポイントは日によってまちまちで、気持ちや体調によることが伺える。
- ・パニックやイライラからの自傷はほとんどない。(月に1回あるかどうか)

その他エピソード

- ・音声言語理解

繰り返し聞くことで、言葉で理解できることが増えた。

言葉で理解できた単語・・・ワーク/トイレ/休憩/グラウンド/アリーナ/給食/教室/デイの名前 等

- ・音声模倣をしようとする芽生え

口形を真似して発声する様子が見られている。

給食の時に場面を決めて促していると、用事のある時は発声で知らせるようになってきた。「え〜」(せんせい) 等

- ・中学部の授業見学ができた。

事前の動画で見通しが立つと、中学部棟に移動でき、初めて入る教室にも入ることができた。(図15)

(図15)



今後の見通し(中学部で)

- ・タブレットは補助的に使うが、必要となるタイミングで導入するのが良い。
- ・現状は絵カードが使いやすいので、まずは身についた方法で信頼関係を作ることから始める。
- ・絵カードはいつでも、どこでも、誰とでも使える手段として確立しつつある。
- ・休憩を取る時間は必要である。活動を選択できるような環境を設定すると、活動に参加しやすい。
- ・自身のスケジュールを自身で作れるようになれば、もっと生活しやすくなるのではと思う。